

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

9月発生した台風18号は、観測史上初めて九州・四国・本州・北海道の4島全てに上陸し、全国各地で甚大な被害が出た。被害農家からは「残った農産物

だけでも出荷したい」との悲痛な声が聞こえてくる。

大北地域、特に白馬地域では、収穫時期でも秋雨により思うような農作業ができない状況。一部農家からは、天候に左右される農作業に合わせて、息子たちが職場で休暇が取れないで困る。来年からは、大幅に耕作面積を減らさなくては、と寂しげに話す年配者。だが、現在耕作している多くの水田は、事情により耕作できない農家から請け負った水田。返したら「どうなるのか」と気がかりになる。10月に入っても、里には刈り取りが終わら

ない水田が広がる。従前の集落単位の耕作や地域全体を網羅した大規模経営では対応は無理なのかと考えてしまふ。どんな対応が可能かと考えた時、亡き父が、青年時代に富山から耕作馬を借り、白馬

く思い出す。一地域では、経営困難な時代に広域的な視野で農業経営していた現場があったことに驚きを覚える。高度成長期で民営と農業経営の兼業化が進み、農業経営だけでは購入できない

いる。また所有する農業用機械類も年々古くなり維持管理経費の負担も経営を苦戦させているのが現状なのだろう。現在計画されている、1枚当たりの水田面積の拡大だけでは、乗り切れない状況が予

地域農業を守る為には長野県全域を視野に入れた思考が求められている

で耕作して、安曇野に引き継ぎ、最終的に長野市川中島での耕作に馬を使い富山に返した話や、地域の長老も昔は、白馬で農作業を済ませ、農業用機械を持

かかった高価な機械類が、各農家別々に急速に整備された事が本当に良かったのか、今悔やんでも仕方ないことなのだろう。地域で活躍する営農

想される今、自分達の地域の農業経営を誰に託すのか、大きなエリアの視点から考えなくてはいけない状況に追い込まれている印象を強く持ってしまう。確かに地域農業を守る

が、超高齢化社会での地域農業を考えた時、資産意識を抱いた継続の思考では困難さは増すばかりだろう。地域にとって、農地ではなく、地域存続の為に利

用確保すべき土地の状況がどうあるべきなのか。今後注目して行きたい。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



10月に入っても白馬村大出地籍など村内各所に多くの未収穫の稲田が広がっている